
気まぐれで短めの連載に挑戦！

叶夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれで短めの連載に挑戦！

【Nコード】

N2513BA

【作者名】

叶夢

【あらすじ】

短いかどうかなんて書いてみないと分かりません！ww

ユイ

カナ「今日はライブ行こ！」

そう言つて友達のカナに連れられてここ、小さめのライブハウスに
来た

ユイ「カナあ…耳痛いよ…」

カナ「慣れれば大丈夫」

そんなこんなで誰か知らないバンドの演奏が始まった

ユイ「…！」

…かつこいいい！！

ヴォーカル「どうも！phantomファントムです！今日は盛り上がっていきましょ〜！」

カナ「ユイ！phantomのヴォーカルかつこいいでしょ？」

ユイ「…うん」

その日は、その人のことしか頭に無かった

一日中、ずっと名前も知らないひとのこと好きになって考えてた

カナ「終わった〜！」

ユイ「バンドつてこんなにたくさんあるんだね」

カナ「そうだよ〜！疲れた？」

ユイ「正直」

カナ「さ、次は打ち上げよお！」

ユイ「え?!」

????「カナ」

後ろから顔を出したのは

カナ「お疲れ〜!今日もよかったよ」

????「サンキュ」

カナ「あ、この子あたしのダチのユイ」

????「今日は来てくれてありがとう。じゃ、打ち上げいきますか」

あの人だ!!!

phantomのヴォーカルのひと!

ユイ「あの!」

ヴォーカル「ん」

ユイ「…お名前は?!」

葵「あ、俺?葵です」

ユイ「あ…ユイです!」

カナ「さっきあたしが言ったでしょw」

カナの突っ込みで動き出す

ついたのはかの有名な焼き鳥屋さん

葵「2人は未成年でしょ?じゃ、オレンジジュースね」

カナ「しかたないな」

ユイ「仕方ないって!当然でしょ?!」

カナ「冗談だよw」

葵「ユイちゃんは知らないか。メンバー紹介でもする?」

そう言つて4人がすつと立ち上がった

葵「さつきも言つたけどヴォーカルの葵アオイです」

信「俺はギターの信シンです!」

祥「ベースの祥ショウです」

昴「ドラムの昴スバルです。よろしく^^」

カナ「皆漢字一文字なんだよ」

ユイ「あたしも一文字!結うつて漢字」

カナ「あたしだけあたしだけ二文字じゃん!」

葵「ま、ユイちゃんこれからもよろしくね!」

ユイ「はい!」

あたしは打ち上げ中も葵さんから目が離せなかった

カナ

ユイ「ただいま」

母「ただいまじゃないでしょ！勉強もしないで何してるの？！」

ユイ「はいはい」

母「そんなだつたら家庭教師つけて無理にでも勉強させるわよ！」

せつかく気持ちのいい日だったのに…

ユイ「勝手にすればあ？」

なんなの？母さんはどれだけ勉強したからそんなことが言えるのよ

ユイ「ああもう！」

部屋でまた葵さんのことを考えてみる

ユイ「一目惚れなんて初めてだなあ」

そのとき、鞆の中で響く着信音

『fromカナ』

葵クンがユイのメアド聞きたいらしいよ？いい？』

ユイ「え？！」

今思うと、カナからのメールにしては寂しい気がした
でも嬉しくてそんなどころじゃなくて…

『全然いいよ 葵さんにもよろしくね!』

つて返信

『from葵

カナから聞きました!

今日は本当にありがとう

これからもphantomをよろしくね!...!』

愛しのひとからの初メール...

『はい!よろしく願いします!』

時計を見ると夜十時を回ってた

『はい!よろしく願いします!おやすみなさい』

そうしてあたしは眠りについた

葵

母「ユイ！家庭教師の先生いらっしやったわよ」

朝、眠い目をこすりながら下におりる

ユイ「何の話？」

母「早く着替えなさい。今日は体験で先生お呼びしてるから」

ユイ「なんの？」

母「家庭教師だっって言ってるでしょ？」

ユイ「はあ？何それ！聞いてないし！」

母「あんたが勝手にしろっって言っから勝手にしただけよ」

あのばあ！！！！って心の中でサイテーなこと叫びながら着替える

母「お待たせしました。どうぞ」

前言撤回…母さん大好き！！！！

ユイ「葵さん…」

葵「ユイちゃんじゃん！！」

母「あら、知り合い？じゃあやりやすいわね」

スリッパの音を残してリビングに去っていく母

ユイ「カテキョーって…葵さん？」

葵「そうっばいねw」

ユイ「歌じゃないの？」

葵「こっちはバイト。本業はあつちのつもりだよ」

ユイ「…こ…こんなところもなんだし、上いきましょ?」

部屋にはほとんどいないから汚くもキレイでもない部屋に案内

葵「女の子の部屋つて感じだねw」

ユイ「そうですか?」

葵「はい、じゃあ苦手な教科はなんですか?」

つて家庭教師らしい質問しながら眼鏡をかける葵さん

その葵さんからまた目がはなせない

葵「ユイちゃん?」

ユイ「あ…いや…眼鏡…似合うなあってw」

葵「ああ…ありがと(?)」

気まずい…

葵「まず…英語からする?」

ユイ「はい」

久しぶりに机に向かう

葵「分からない所ある?」

ユイ「えつと…」

英語…得意な方なんだけどw

葵「………」

ユイ「……」

黙ってたらず急に頭を撫でられた

ユイ「わあっ！」

葵「あ、ごめん…髪の毛細くてきれいだな〜って思ってた」

恥ずかし…鼓動が速くなる

ユイ「英語は…大丈夫」

葵「あ…本当に?!ごめんw」

ユイ「いや…じゃあ…あの…葵さんの好きな教科は…?」

葵「俺?...音楽ww」

ユイ「あ!そうか!w」

正直、今日は体験だからって、ほとんど勉強してないですw

でもほんとに…気になってる人という時間って短く感じるね…

葵「どうでしたか?ユイちゃん」

ユイ「最高に楽しかった!」

葵「じゃあお母さん、家庭教師始めるならまた電話してください」

母「はい!またユイと相談して決めさせて頂きます」

葵「じゃあ…またねユイちゃん」

家の中から光が消えた

ユイ「母さん!あたし葵さんとすっごき気あつの!だから家庭教師とって!」

母「あなたの顔見てたらもうとるの決定してるわよ」

ユイ「やった!!」

それからあたしの勉強タイムが始まった

マキ

ユイ「でね！びっくりしちやってさ！！」

次の日、登校中にカナに言った

カナ「いいなあ」

ユイ「一週間に二回！火曜日と金曜日なんだあ！」

カナ「……」

ユイ「カナ？」

カナ「あたし、小学生の時に葵クンに初めて会ったんだ」

ユイ「え？」

前だけを見て話すカナ

カナ「小学校…五年生かな？葵クンたちが高校三年生の時」

ユイ「うん…」

カナ「お父さんに連れられてライブに初めて行ったんだ

そのときphantomをみて、一目惚れしたの」

一目惚れ…

カナ「葵クン…今とほとんど変わらないなあ…」

好きなの、葵クンのこと。前から今もずっと」

……うそ

カナ「応援してくれるかな……？」

ユイ「……」

カナ「やっぱり無理」

ユイ「へ？」

カナ「分からない訳?! あたしが好きだったって! なのに普通葵ク
ンのこと好きになる?!」

聞いたことの無いカナの声

カナ「お前マジドーでもいいわ! あんたなんかと絡んだあたしが悪
かった」

どうゆう展開か分からないままカナがあたしの前から消えた

???「ユイ？」

後ろから声をかけられる

ユイ「はい?!」

そこには男友達の裕也がいた

裕也「なにぼーっとしてんだよ。アホ面丸出しだぞ」

ユイ「なによ! …もうちよっと声のかけ方ってのがあるでしょ?」

裕也「知らねえよwつまんねえ顔してんじゃねえよの方がいいか?

w

ユイ「ばあか!」

そっからいろんなこと、裕也に話した

裕也「めんどくせえな。女って」

ユイ「……」

裕也「そんなこと言うやつ放つとけよ」

ユイ「いいのかなあ……」

裕也「いいんじゃないやね？ユイのダチってカナだけじゃねえんだし」

ユイ「でも……！phantomのライブ行きにくくなるし」

裕也「気にしすぎだろ！ばかじゃねえの?!」

こいつ……本当に傷つく……

裕也「俺も連れてってよ。その……ふぁ……何とかのライブ」

ユイ「そのうちね……」

気を落としながら学校についた

裕也「おい……」

ユイ「ん……?」

裕也「だから……俺が言いたいの……気にしすぎんなって事!」

ユイ「はい」

そうだね……気にしすぎたらおちるだけだし……

ユイ「さんきゅ」

って言った時にはいなかった

ユイ「おはよ〜」

「おはよ〜」

「おいつす!……」

あたし1人が一回言っただけで、これだけのひとが返してくれる…

あたしは1人じゃない…

ユイ「はあ」

カナ「マジきもいんだけど！よく来れるよねww」

カナはもう仲間を作って愚痴ってる
もうそんなの気にしない

マキ「ユイ？どしたあ？」

クラスの頼れるお姉さんてき立場のマキが話しかけてくれた

ユイ「カナと喧嘩してさあ〜」

マキ「やっぱり？wカナが怒ってると言えば喧嘩しかないなあと思
ってさw」

ユイ「あは、ばれたw」

その一日はずっとマキと過すごしてた

でも、カナの怒りはおさまらず…

祥

ユイ「……………」

葵「そつか…カナと喧嘩しちゃったか…」

今日は金曜日。葵さんにカナと喧嘩したことを言ったでも原因は言えないデス

葵「ま、カナも気難しい子だけど仲良くしてやってよ」

ユイ「ずるい…」

葵「へ？」

ユイ「そうゆう所が人気あるんですね、葵さんは」

自分が何を言ってるか分からない

葵「ユイちゃん？」

ユイ「ずるいです。容姿も性格も素敵で、完璧すぎるんです。だからモテるんです」

葵「何言ってるの…?」

ユイ「優しすぎるの、もう少し怒ってみたりしてくれたらこんなに辛くないのに」

葵「ユイちゃん」

ユイ「気持ちを抑えれないんです」

葵「ユイちゃん！」

ユイ「いいですよね…葵さんが笑ってるだけで周りが幸せになる」

葵「ユイちゃ」

ユイ「でも、あたしみたいに」

葵「ユイ！」

葵さんの大声が部屋に響く

葵「俺の話も聞けよ…」

ユイ「でも」

急に抱きしめられる

葵「落ち着けて…」

ユイ「何人も女性をそうやって抱きしめてきたんでしょ…」

葵「ユイちゃん…俺のこと信じられない…?」

ユイ「……」

そつと離れる

葵「俺は…ユイちゃんのこと…好きだったよ」

え…

葵「今日はもう終わりにしようか」

ユイ「あのっ…」

葵「また火曜日ね…ばいばい」

1人になった淋しい部屋

ユイ「あたし…何言っただの?どうしてこんな…うまくいかないの…?」

そこで1人で涙を流した

祥（後書き）

気まぐれだから短くても許して!!!
W
W

裕也

ユイ「もう本当にヤだ…」

裕也「そうですかあゝ」

また裕也と登校してみる

ユイ「慰めてよ…」

裕也「はいはい、残念でした」

ユイ「……」

気づけば裕也のシャツの裾をつかんでた

裕也「…!」

ユイ「慰めてってば…」

裕也「…離して…」

ユイ「やだ」

突然抱きしめられる

裕也「離せって言うてんだろっ…」

ユイ「…裕也…?」

裕也「ばか…そんなことするとか…反則だろ…言うこと聞かないのが悪い」

ぱっと離して走っていった

何今の…

ユイ「おはよあ」

マキ「……」

ユイ「マキい？」

マキ「あ…おはよ」

ユイ「元氣無いね、どうし」

マキ「あたしさあ…裕也のこと好きなんだ」

まさか…

マキ「ユイは…その…家庭教師だよね…？」

ユイ「そっだよ」

マキ「わかった！疑ってごめん！カナにさっきユイは裕也と葵に二股かけてるって聞いたんだ…」

そんなわけないって信じてたけど、心配になってさ…ごめんね？」

ユイ「…っ！」

マキは大人だなあ…

そこまでマキを不安にさせたカナが許せない

ユイ「ちよつとごめん…」

マキを置いてカナの腕をつかみにいく

カナ「痛あ！なに？」

ユイ「何じゃねえよ！マキに何言ってるんだよ?!」

マキ「…ユイ？」

ユイ「でたらめばかり言ってるじゃないわよ！あんたそのうち痛い目あつよ」

カナ「ウザっ…w 葵くんがあんたのこと嫌いになったって言ったよ」

その言葉を聞いた瞬間自然に涙が出た

カナ「あんたみたいになやつは無理って事。分かったらさっさと葵クンの前から消えろや」

ユイ「……」

あたしは耐えられなくなって鞆を持って今通った道を走った

* * *

マキ「ふざけてんじゃねえぞ…」

ユイが帰って今の状況をやっと把握できたマキ

カナ「せっかくいい情報あげたのに…敵にしないでよお」

マキ「マジなんだよ…ひとの弱いところにつけ込んでおもしれえか？」

マキはキレると男になるって噂は本当だった

マキ「しょーもねえ嘘ばかり言っつと、お前何も無くなるぜ」
カナ「ウザイ…マキってね！三組の裕也のこと好きなんだよお！」

急に大声を張り上げるカナ
それにざわつく廊下

カナ「マキは裕也が好き」マキは裕也が好き」
マキ「…っ」

何も言えないマキ

カナ「マキは裕也がすき」マキはゆう」
裕也「おい」

裕也が割り込む

裕也「なんか騒がしいと思ったらやっぱりお前か。いい加減にしろ
けよ…？あ？」

カナ「だって本当の話だし！」

裕也「俺が手え出さねえと思ったら大間違いだぞ？わかったな？」

そう言っつて裕也はマキの手を引いて学校を抜け出した

* * * *

真

裕也「ちよつと入れろや」

ユイ「え?!裕也?マキ?」

マキ「急にごめん…」

目の赤いマキと見るからに怒ってる裕也を部屋にいれる

マキ「いいの?」

ユイ「いいよ、母さん仕事だし」

部屋についてすぐあぐらをかく裕也

裕也「マジなんだあの女?!」

ユイ「カナのこと?」

マキ「…本当だよ…」

裕也「あいつ」

裕也にあたしが帰った後の出来事を聞いた

ユイ「サイテー…」

マキ「なんであんな豹変したの?ユイなんか知らない?」

裕也「あの話からか…」

マキ「え?」

裕也「葵ってやつのこと好きだったんだけど、ユイも…」

マキ「そうゆうことが…」

それぞれの表情が気になる

裕也「そろそろシメないとな、あいつ」

マキ「そうだなあ……」

ユイ「あたしが悪いのかも……」

日が暮れるまでずっと話してた

ピンポーン

またインターフォンがなる

葵「ユイちゃん……」

ユイ「葵さん?! あ、いまひといるんですけど、いいですか?」

葵「うん……」

ユイ「じゃあ入ってください」

裕也「だれ?」

ユイ「あ、あの、家庭教師の葵さん」

葵「どうも?」

マキ「カナっぽいねw」

葵「紹介してくれる?」

ユイ「あ、友達の裕也とマキです」

裕也「……」

マキ「こんにちは……」

裕也……キレてる? w

裕也「あんたに話があんだけど」

葵「俺?」

裕也「ユイのこと嫌いになったって本当に言ったのか?」

葵「……何の話?」

裕也「今朝カナが言い出したんだよ、お前がユイの事嫌いになった

んだって。それで学校抜けてきたんだよ」

葵さんがこつちをちらっと見る

裕也「どうなんだよ？」

葵「言うわけないだろ……」

裕也「ほんとだろうな？」

葵「なんで初対面でそんな疑われないといけないのかな？」

裕也「別に……」

葵「とにかく……ユイちゃん、前も言ったけど、俺は……好きなんだけどな」

沈黙に包まれる

マキ「どうゆうことですか？」

葵「いや、だから、俺はユイちゃんの事好きなんだよね」

裕也「かよ……」

葵「カナがどうなったかは知らないけど……俺は絶対言わない」

突然裕也が立ち上がる

裕也「お前、本当にユイのこと大事にできんのかよ?!」

葵「申し訳ないが、君のような礼儀知らずよりかは大事にできるつもりだけだな」

裕也「ちっ……マキ、帰るぞ」

マキ「う……うん」

裕也が出て行った瞬間、マキが葵さんの耳元で呟いた

マキ「ユイのこと傷つけたら承知しねえぞ？」

マキの本性現る

葵「すごい友達だね…w」

ユイ「あの…このまえはごめんなさい…」

葵「気にしないで」

気まずい…

ユイ「あのっ…」

葵「あのさ！」

ユイ「お先にどうぞ」

葵「いや、たいしたことじゃないから」

ユイ「じゃあ…あの、本当に、信じていいんでしょっつか？」

葵「何が？」

ユイ「好きだつて話…」

葵「当然だろ？」

真っすぐな瞳

ユイ「ありがとう」

でも…そんなうまくはいかない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2513ba/>

気まぐれで短めの連載に挑戦！

2012年1月14日14時53分発行